

秘境の宿

奈良県の十津川村に行ってみました。奈良県の南部、日本で最も広い村です。日本一長い路線バス、日本一の谷瀬の吊り橋、大峰山修行、熊野詣などで有名。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の多くが、この地域にあります。東西南北にいくつもの山脈が走り、山々には霊場が、谷々には集落が点在する山深き秘境です。2011年には台風12号の水害で、山が深層崩壊し、土砂ダムができた姿が連日ニュースで報じられました。明治時代には、水害被災者が北海道に移住し、新十津川村を開拓した歴史があります。水害が多い地域でもあります。



中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



宿は谷筋の1軒宿でした。十津川温泉から5kmほど離れた場所。「瀟峡（どろきょう）の宿」というのがウリです。小さな宿です。お客さんも3組か4組。食事時間以外には他のお客さんに逢いません。近所を散歩するくらいしか、やることもありません（散歩ついでに人力ロープウェイの“野猿”に乗れるのがビッグ・イベントです）。当然、Wi-Fiもつながりません。テレビを見るか露天風呂を楽しむこと以外には、やることはありません。そんな宿なので、露天風呂に3回入りました。最初は夕食前の薄暮時、次は就寝前、最後は朝風呂。3回とも露天風呂を独り占めです。新緑の広葉樹のなかでウグイスやヤマガラが鳴き、せせらぎの音が聞こえて



▲顔を隠して？ 野猿に乗る筆者

きます。俳句でも詠みたくなるような天国を味わいました。

夕食時、接客をしてくださる女性の日本語に、癖があることに気づきました。隣のお客さんと雑談になり、スマホでお子さんの写真を見せておられます。「11月まで」という声が聞こえました。中国から働きに来ておられるのです。十津川村の素材を使った料理を説明できるのですから、日本語は上手です。経営者に聞くと、就労ビザで1年契約で来てもらっているということ。

帰り道で、ふと思いました。地元の十津川高校には商業科があったはず。しかし、そこでは労働需要をまかなえず、国際的な出稼ぎにそれを求める。高度経済成長を支えた集団就職と出稼ぎが、国境を越えて行われ始めている。お客さんも仲居さんも外国人、という日本旅館が生まれるのも、遠い日ではない。そんなことが頭をよぎりました。

(MBO 実践支援センター代表)